

島根県における高校生の性行動と 関連因子の検討

こう の よし え¹⁾ すず き けん たろう¹⁾ たか お なる ひさ¹⁾
 と だ とし こ¹⁾ ほそ だ しん じ²⁾ ふじ たに あき こ³⁾
 おお しろ ひとし⁴⁾
 大 城 等

キーワード：高校生，性行動，精神健康

要 旨

島根県の高校生の性行動の実態を把握して、現状に即した生活指導・性教育に活かすために本研究を実施した。2003年～2004年に、研究の目的を説明し同意の得られた公立高校の生徒762名に、性行動に関する質問紙調査、精神健康度調査票12項目・日本版を行った。回答が有効であった602名（男子231名，女子371名）を分析対象とした。性交経験率は19.3%（116/602）で、全日制高校生の性交経験率は男子で1年生11.1%，2年生20.7%，3年生27.8%であり，女子は1年生9.8%，2年生24.0%，3年生43.1%であった。男子では，性交経験者は未経験者に比べて，飲酒・喫煙率が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。女子では，性交経験者は，飲酒・喫煙率に加えて性被害経験率が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。

今後，家庭・学校・地域・医療などが様々な立場から今の時代にふさわしい性教育を共に考え，行うことが重要であると考えられた。

1. 緒 言

近年，高校生の性交経験率が増加している。それに伴って10代の妊娠・人工妊娠中絶¹⁾，性感染症²⁾の増加が問題となっている。

10代の妊娠や性感染症を防ぐには，高校生に対

して正しい知識や学生のニーズにあった生活指導・性教育の実践が必要である。しかし実際は高校において，性教育の方針は確立していないのが現状である。そこで島根県の高校生の性行動の実態を把握して，性行動が活発になっていく過程にはどのような因子が存在するのかを明らかにし，現状に即した生活指導・性教育に活かすために本研究を実施した。

Yoshie KONO et al.

1) 松江生協病院 2) 細田クリニック

3) 島根県保健環境科学研究所 4) 島根県雲南保健所

連絡先：〒690-8522 島根県松江市西津田8-8-8

2. 対象と方法

1) 対象

2003年8月～2004年9月に、著者が性教育を行った学校のうち、研究の目的を説明し同意の得られた公立高校（全日制3校、定時制1校）の生徒に質問紙調査を施行した。質問紙の回収率は82.8%（631/762）で、そのうち回答が不十分なものと、定時制高校の20歳以上を除いた602名（有効回答率95.4%）を分析対象とした。対象の背景は、平均年齢16.1歳（15～19歳）、性別は男子231名、女子371名であった。

2) 方法

性教育講演会前に、性行動に関する質問紙調査、精神健康度調査票12項目・日本版（以下GHQと略す）を行った。性行動についての調査内容は、性交経験の有無、両親の離死別経験の有無、親族からの虐待経験（身体的暴力、性的虐待、言葉による暴力、食事をもらえなかった、その他）の有無、性被害経験の有無、喫煙・飲酒の有無、コンドームの性感染症に対する有用性である。性交経験があるものには、パートナーの数、妊娠経験の有無、避妊の有無、コンドーム使用方法、パートナーと避妊の話ができるか、相手がコンドームを嫌がったときに説得できるかを尋ねた。GHQは12項目版を使用し、3点以上を精神不健康とした。

これらの調査はプライバシーに十分配慮し、目的以外に用いることは決してないことを説明し、無記名で各自封筒に入れてもらい回収した。

統計処理に関して、高校生の学年別性行動については全日制高校のみで処理を行った。学校情報の保護の点より、統計処理は学校別にはせず一括

で行った。

3. 結果

1) 性交経験は116名にあり性交経験率は19.3%であった。親の離死別経験があるものは89名（14.8%）、親族からの虐待経験があるものは52名（10.4%）、性被害経験があるものは23名（3.9%）であった。

2) 高校生の学年別、男女別にみた性行動

全日制高校生の性交経験率は、男子で1年生11.1%、2年生20.7%、3年生27.8%であり、女子は1年生9.8%、2年生24.0%、3年生43.1%であった（図1）。

性交経験者において、平均初交年齢は15.3±1.1歳（13～17歳）で平均パートナー数は2.5±2.9人（1～25人）、妊娠経験者は8名（7.1%）、避妊をしていると答えたものは93名（83.8%）であった。性感染症予防にコンドームが有用であると答えたものは97.4%であったが、実際のコンドームの使用について聞いたところ、「いつもつける」は54.4%、「ついたりつけなかったり」36.8%、「つけない」8.8%であった。（図2）。コンドーム使用とGHQとの関連をみると、精神不健康でない人は、「いつもつける」人が多かった（図3）。

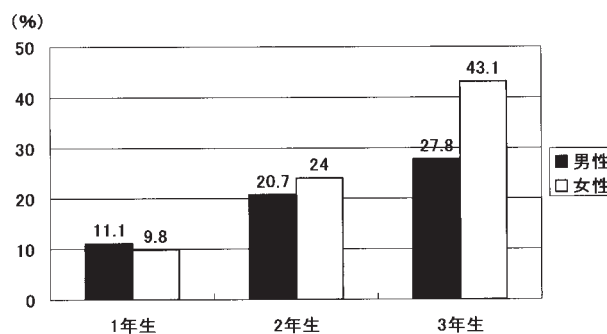


図1 島根県の高中生性交経験率 (n=504)

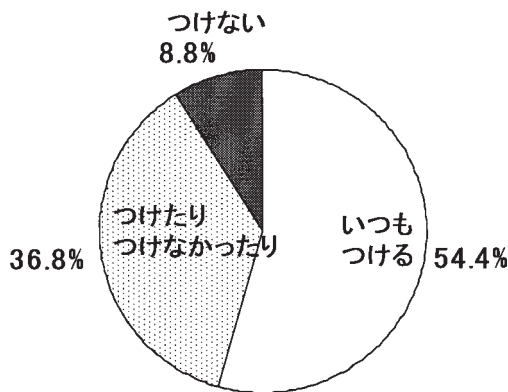


図2 コンドーム使用の実際 (n=114)

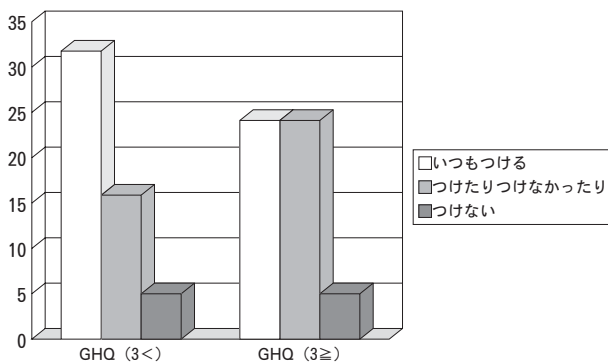


図3 コンドーム使用と GHQ (n=113)

また性交経験者に「コンドームを自分で買うことができますか」と尋ねたところ、男子は98%ができると答えたのに対し、女子では80%と、男子に比べて女子で有意にコンドームを買うことができなかつた ($p < 0.05$)。「パートナーと避妊の話ができますか」「相手がコンドームをつけることを嫌がったときに、つけるように説得できますか」の質問に対しては、男女間で差はなかつた。

3) 性交経験に関連する因子

男子では、性交経験者は未経験者に比べて、飲酒・喫煙率が有意に高かつた ($p < 0.001$) (表1)。女子では、性交経験者は、飲酒・喫煙率に加えて性被害経験者が有意に高かつた ($p < 0.001$) (表2)。飲酒・喫煙について判別分

表1 性交経験と関連する因子 (男子)

	性交経験あり	性交経験なし
親族からの虐待経験率 (%)	16.2	7.1
身体的暴力経験率 (%)	13.5	4.3
性被害経験率 (%)	3.6	1.7
喫煙率 (%)	51.9***	11.9
飲酒率 (%)	59.3***	15.8
精神不健康 (GHQ \geq 3) (%)	46.9	40.6

有意差検定 *** $p < .001$

表2 性交経験と関連する因子 (女子)

	性交経験あり	性交経験なし
親族からの虐待経験率 (%)	12.5	9.4
身体的暴力経験率 (%)	12.5	3.5
性被害経験率 (%)	15.7***	2.6
喫煙率 (%)	21.6***	2.2
飲酒率 (%)	38.0***	12.8
精神不健康 (GHQ \geq 3) (%)	55.8	44.4

有意差検定 *** $p < .001$

表3 初交年齢16歳未満と関連する因子

	16歳未満	16歳以上
親族からの虐待経験率 (%)	23.8 *	0
身体的暴力経験率 (%)	21.4 *	0
性被害経験率 (%)	7.5	10.2
喫煙率 (%)	35.8	40.8
飲酒率 (%)	41.2	56.0
精神不健康 (GHQ \geq 3) (%)	49.0	55.3

有意差検定 * $p < .05$

析を行ったところ、男女とも年齢に関係なく性交経験に独立して影響していた。

性交経験者のうち、初交経験が16歳未満であったものでは16歳以上のものに比べて、親族からの虐待経験が有意に高かつた ($p < 0.05$)。虐待の内容は身体的暴力が有意に多く ($p < 0.05$)、他の虐待内容は差がなかつた。(表3)。

4. 考 察

2005年の東京都性教育研究会の調査によると、高校生の性交経験率は、高校3年生男子が35.7

%, 女子が約44.3%と, 増加の一途であった性交経験がやや減少したと報告されている³⁾。1999年に松江市で調査した高校生の性行動調査では, 性交経験率は男子1年生8.1%, 2年生22.9%, 3年生31.5%, 女子は1年生4.6%, 2年生18.9%, 3年生25.9%⁴⁾であった。今回の結果をみると, 男子の経験率はやや減少し東京都と比べても低い, 女子はどの学年においても増加し東京都とほぼ同じで, 女子の性行動が活発化していることがわかった。

セーフター・セックスの最も有効な手段であるコンドーム使用について, 性交経験者の97.4%が「コンドームは性感染症予防に有用」と答えているにもかかわらず, コンドームを「いつもつける」ものは54.4%と少なかった。性に関する情報が氾濫するなかで, セックスに伴うリスクへの認識は部分的にあるものの, リスク回避行動には結びついていない。若者の行動変容を進めるためには, 知識や興味のみならず, 自らがおかれた状況を認識し, リスク回避行動に結びつくような効果的な性感染症予防教育が必要⁵⁾と報告されている。我が国においては従来性教育が行われているにもかかわらず, 若年者の人工妊娠中絶や性感染症が増加しており, 性教育の手法を見直す必要があると考えられた。

また男子に比べて女子は, コンドームを買うことができないことがわかった。女子の性交経験が増えているにもかかわらず, コンドームを買うことができないということは, 妊娠・性感染症の両面でとても危険である。劔らは男子に比べ女子では「男性に求められたら, 女性はセックスに応じるべき」「セックスは男性が主導権を握るべき」「女性がセックスを求めたり, セックスについて話をしたりするのはしたくない」と考えているも

のが多く, また避妊の費用の面でも女性は男性に依存していることが多いなど, 性的関係において男性優位になっているカップルの存在を指摘している⁶⁾。女子生徒が高校在学中に妊娠すると, 学業中断することが多く, 職業選択を狭めてしまう。女子には特に「自分の身体を大切にすること」「ノーと言えること」を教えることが必要である。

GHQは, 神経症の症状把握・発見に有効であり, 60項目版と30, 28, 20, 12項目の短縮版があるが, 福西はGHQ短縮版でもGHQ60項目版と同程度の判別能力を有しており, GHQの幅広い使用方法が可能と報告している⁷⁾。コンドーム使用とGHQとの関連では, 精神不健康でない人は「コンドームをいつもつける人」が多かった。これより性教育でコンドーム使用を教えるばかりでなく, 精神健康度を高めるような手法が重要であると思われた。先行研究によると, コンドームの使用に至るには「コンドームに対するイメージ」「相手とのコミュニケーション」「適切な使用に対する自信」「コンドーム入手の能力」などの要素があると報告されている⁸⁾。今後, より適切なセーフター・セックスに関連する尺度を作成・測定し, それを高めるためにはどのような性教育を行えばよいかを検討する必要があると考えられた。

さらに性交経験者と未経験者で関連因子の比較をしたところ, 男子では飲酒・喫煙が, 女子では飲酒・喫煙に加えて性被害経験のあるものが有意に高かった。飲酒・喫煙については判別分析で性交経験に独立して影響を与えていることより, 飲酒や喫煙を行う集団や雰囲気性交につながりやすいと考えられる。廣原らは男子高校生の調査で, 喫煙, 飲酒, 性行動体験のあるものは, いず

れもエゴグラムでM型をとり、心理的特性が近似していたと報告している⁹⁾。このような行動をとる生徒に対して、心理特性に配慮して学校や家庭でわかりやすく指導を行うことが必要である。

女子の性被害経験について、小西は大学生430人を対象とした調査で女子の約7割が性被害経験を持っている¹⁰⁾と報告している。被害者は自尊心が低くなり、虐待の再演という形で望ましくない性行動をとることが知られている¹¹⁾。今回の調査でも女子の性交経験者に性被害経験者が多かったことより、いやな接触に対して「ノー」と言えることを教える子どもへの暴力防止プログラム(CAP: Child Assault Prevention)¹²⁾を広めること、性被害者に対してのケアやカウンセリング¹³⁾など、性被害に対する統合的なアプローチの重要性が示唆された。

性交経験のあるもののうち、初交経験が16歳未満であったものでは16歳以上のものに比べて、親族からの虐待経験が有意に高かった。以前我々は10代で出産した母は、親族からの虐待経験が高かったことを報告した¹⁴⁾。今回の結果からも、早すぎる初交経験は家庭からの逃避と考えられ、親との関係に何らかの問題があった可能性が示唆さ

れた。

現在性教育に対して、「行き過ぎた性教育で性が乱れた」と批判されることもあり¹⁵⁾、学校関係者は性教育に及び腰になっている。しかし子どもたちは、メディアからの過激な性情報にさらされ、間違った性の知識で行動しようとしている。今、私たちは子どもたちの現状を直視し、家庭、学校、地域、医療などが様々な立場から今の時代にふさわしい性教育を共に考え、行うことが重要であると考えられた。

5. 結 語

島根県においても高校生の性行動は活発であることがわかった。今回の調査で明らかになった子どもたちの現状を直視し、家庭・学校・地域・医療などが、今の時代にふさわしい性教育を共に考え、行うことが重要であると考えられた。

謝辞 この研究を行うに当たり、協力してくださった学校の教職員の皆様、市町村の保健師の皆様、また調査に回答してくださった高校生の皆様に心から感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 母子保健の主なる統計，財団法人母子衛生研究会編集，母子保健事業団，2005
- 2) 熊本悦明，日本における性感染症（STD）サーベイランス：日本性感染症学会誌，13：147-167，2002
- 3) 東京都幼・小・高・心障性教育研究会：2005年調査児童・生徒の性，学校図書，2005
- 4) 母子保健指標改善強化対策事業報告書：島根県松江健康福祉センター，2000
- 5) 木原雅子，木原正博，若者に対する HIV 予防介入に関する研究：平成15年度厚生労働省 HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学研究班報告書
- 6) 剣 陽子，北九州近郊地域における高校生の性行動・性意識調査から：Quality Nursing, 8(11): 897-904, 2002
- 7) 福西勇夫，日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point：心理臨床，3(3)：228-234, 1990
- 8) 野々山未希子，白井千春，石川陽子，早乙女智子，剣陽子，野田陽子，堀口雅子，若者の性行動とセーフター・セックスに関するセルフ・エフィカシー（自己効力感）測定尺度の作成：日本性感染症学会誌，14(1)：

52-59, 2003

- 9) 廣原紀恵, 服部恒明, 瀧澤利行, 茨城県高校生の喫煙・飲酒・性行動とエゴグラム: 学校保健研究, 43: 510-517, 2002
- 10) 小西聖子, 日本の大学生における性被害の調査: 日本性研究会議会報, 8-2: 28-47, 1996
- 11) 池田由子, 性的虐待と近親姦. 児童虐待 (危機介入編), 齊藤学編, 今剛出版, 1994
- 12) ベティー・ボガホールド作, 安藤由紀訳, とにかくさけんでにげるんだ: 岩崎書店, 1999
- 13) 佐々木静子, 産婦人科医療と性暴力被害女性へのケアとネットワーク: アディクションと家族, 16(3): 294-301, 1999
- 14) 河野美江, 戸田稔子, 細田眞司, 10代で出産した母における心理社会的困難性: 心理臨床学研究, 22(1): 83-88, 2004
- 15) 浅井春男, 北村邦夫, 橋本紀子, 村瀬幸浩, ジェンダーフリー・性教育バッシング: 大月書店, 2003